『アイヌのはなし カムイのうた』

◆『アイヌ神謡集（編・訳 知里幸惠）』
●『えぞおばけ列伝（編・訳 知里真志保）』
より抜粋・構成

◆序

その昔この広い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました。

冬の陸には林野をおおう深雪を蹴って、天地を凍らす寒気を物ともせず山又山をふみ越えて熊を狩り、夏の海には涼風泳ぐみどりの波、白い鴎の歌を友に木の葉の様な小舟を浮べてひねもす魚を漁り、

花咲く春は軟らかな陽の光を浴びて、永久に囀る小鳥と共に歌い暮して蕗とり蓬摘み、紅葉の秋は野分に穂揃うすすきをわけて、宵まで鮭とる篝も消え、谷間に友呼ぶ鹿の音を外に、円な月に夢を結ぶ。嗚呼なんという楽しい生活でしょう。

それも今は昔、夢は破れて幾十年、この地は急速な変転をなし、山野は村に、村は町に と次第々々に開けてゆく。

愛する私たちの先祖が起伏す日頃互いに意を通ずる為に用いた多くの言語、言い古し、残し伝えた多くの美しい言葉、それらのものもみんな果敢なく、亡びゆく弱きものと共に消失せてしまうのでしょうか。おおそれはあまりにいたましい名残惜しい事で御座います。

アイヌに生れアイヌ語の中に生いたった私は、雨の宵、雪の夜、暇ある毎に打集って私たちの先祖が語り興じたいろいろな物語の中、極く小さな話の一つ二つを拙ない筆に書連ねました。

私たちを知って下さる多くの方に読んでいただく事が出来ますならば、私は、私たちの同族祖先と共にほんとうに無限の喜び、無上の幸福に存じます。

●へっぴりおばけ

屋内に独(ひと)りいると突然炉(ろ)の中でポアと音を発する。するとあちらでもポア、こちらでもポアとさいげんがない。臭くてかなわない。そういう際には、こっちでも負けずにポアと放してやれば、恐れ入って退散する。あいにくと臭いのが間に合わぬときは、ポアと口真似するだけでも退散するというから、このおばけ案外(あんがい)に気はやさしいのかもしれぬ。名は「オッケオヤシ（屁っぴりおばけ）」、または「オッケルイペ（屁っこき野郎）」という。

●やかんおやじ

樺太(かふと)の山中に「キムナイヌ（山の人）」というおばけが住んでいる。

頭がつるっ禿(ぱげ)なので、「ロンコロオヤシ（禿頭(はげあたま)をもつおばけ）」とも称する。

おばけといっても案外親切な連中で、山の中で荷物が重くて困っている時など、

「アネシラッキ　ウタラ（守り神さんたち）、イカスウ　ワ！（手伝っておくれ！）」と叫べば、やって来て荷を軽くしてくれる。

ただし、禿頭の話だけは禁物で、山中でうっかりしようものなら、憤慨(ふんがい)して山が荒れ、急に雨が降って来たり、どこからか木片が飛んで来たり、通りすがりに大木が倒れて来たりする。山中で風もないのに大木が、がらがらどっしんと倒れて来たら、それはこの連中のしわざだ。そういう際は、すかさず、

「キムン　ポネカシ（山の小父(おじ)さん）

ヤイカ　ニー（お前さんの上に　木が）

オツイ　ナー（倒れて行くよ）」と唱えれば、あわてて退散する。

このおばけは、がらにもなく血を恐れるといい、里でも血を恐れる人をキムナイヌみたいだとからかう。

◆梟の神の自ら歌った謡

「銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに」と私は歌いながら、人間の村の上を通りながら下を眺めると、昔の貧乏人が今お金持になっていて、昔のお金持が今の貧乏人になっている様です。

海辺に人間の子供たちがおもちゃの弓矢をもってあそんで居ります。

歌いながらその上を通りますと、子供等は「美しい鳥！　神様の鳥！　さあ、矢を射て。あの神様の鳥を一ばんさきに射当てたものは、ほんとうの勇者、強者だぞ」と云いながら、お金持の子供等は、金の弓矢を番えて私を射ますので、私は矢の下や上を通ったりしました。

その子供等の中に、ただの木の弓矢を持った子供が一人います。貧乏人の子らしく、着物でもそれがわかります。けれどもその眼色をよく見ると、えらい人の子孫らしく、ただの弓矢を番えて私をねらいます。すると、お金持の子供等は大笑いをして、

「あらおかしや貧乏の子。あの神様の鳥は、私たちの金の矢でもお取りにならないものを、お前の様な貧乏な子の腐れ木の矢で」と云って、貧しい子を足蹴にしたり、たたいたりします。けれども貧乏な子はちっとも構わず私をねらっています。

私は大層不憫に思い、ゆっくりと大空に輪をえがいていました。

貧乏な子は片足を遠く立て片足を近くたてて、下唇をグッと噛みしめて、ねらい、ひょうと射放しました。小さい矢は美しく飛んで、私の方へ来ました、それで私は手を差しのべてその矢を取りました。

クルクルまわりながら私は風をきって舞い下りました。

すると、子供たちは砂吹雪をたてながら競争しました。

11

土の上に私が落ちると、一等先に貧乏な子がかけついて私を取りました。

金持の子供たちは「にくらしい子、貧乏人の子。私たちが先にしようとする事を先がけしやがって」と、二十も三十も悪口をついて、貧乏な子を押したりたたいたりしました。

貧乏な子は、私の上におおいかぶさって、自分の腹にしっかりと私を押さえ、もがいてもがいてやっとの事、子供らの隙から飛び出し、かけ出しました。

金持の子供等が石や木片を投げつけるけれど、貧乏な子はちっとも構わず、砂吹雪をたてながら、一軒の小屋へ着きました。

子供は窓から私を入れて、斯々(かくかく)のありさまを物語りました。

家の中から老夫婦がやって来て、見ると、大へんな貧乏人ではあるけれども、紳士淑女らしい品(ひん)をそなえています、

私を見ると、腰の央(なか)をギックリ屈めて、ビックリし、老人はキチンと帯をしめ直して、私を拝(はい)し、

12

「ふくろうの神様、大神様(おおかみさま)。貧しい私たちの粗末な家へお出で下さいました事、有難う御座います。昔は、お金持に自分を数え入れるほどの者で御座いましたが、今はもうこの様につまらない貧乏人になりまして、畏れ多いことながら今宵は大神様をお泊め申し上げ、明日は、ただイナウだけでも大神様をお送り申し上げましょう」と申し、何遍(なんべん)も何遍も礼拝を重ねました。

老婦人は、東の窓の下に敷物をしいて私をそこへ置き、それからみんな直ぐに高いびきで寝入ってしまいました。

やがて私は、真夜中に起き上り「銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに」と静かにうたいながら、この家の左の座へ右の座へ美しい音をたてて飛びました。

私が羽ばたくと、私のまわりに美しい神の宝物が、美しい音をたてて落ちました。

私は一寸(ちょっと)のうちにこの小さい家を、神の宝物で一ぱいにし、大きな家に作りかえ、美しい着物を早つくりし、富豪の家よりももっとりっぱに飾りつけました。

夜が明け、家の人々が一しょに起きて、目をこすりこすり家の中を見るとみんな、床の上に腰を抜かしてしまいました。老婦人は声を上げて泣き、老人は大粒の涙をポロポロこぼしていましたが、やがて、老人は起き上り、私の処(ところ)へ来て、二十も三十も礼拝を重ねて、「私共の粗末な家にお出(い)で下さるだけでも有難く存じますものを、国の神様、大神様、私たちの不運を哀れんで下さいまして、大きいお恵みをいただきました事」と泣きながら申しました。

それから、老人は木をきり、りっぱなイナウを美しく作って私を飾りました。

老婦人は身仕度をして薪をとったり水を汲んだりして、酒を造る仕度をして、六つの酒樽(さかだる)を上座にならべました。

それから二日程たつと、はや、家の中に酒の香(かおり)が漂いました。

そこで、村中の今お金持になっている人々を招待するため、あの小さい子に態(わざ)と古い衣(ころも)を着せて、使いに出してやりました。子供が使いの口上を述べますと、人々は大笑いし、「これはふしぎ。貧乏人がどんな酒と御馳走を作って、人を招待するのだろう。行って見物して笑ってやりましょう」と大勢打ち連れてやって来ましたが、ただ家を見ただけで驚いてはずかしがり、そのまま帰る者や腰を抜かす者もあります。

すると、家の夫人が外へ出て、皆の手を取って家へ入れますと、みんないざり這いよって、顔を上げる者もありません。家の主人は鳥のカッコウの様な美しい声で

「貧乏人で、互に往来も出来なかったが、大神様があわれんで下され、この様にお恵みをいただきました。私共は一族の者なんですから、今から村中、仲善くして、互に往来をしたいと望む次第であります」

と申し述べると、人々は何度も何度も手をすりあわせて、家の主人に罪を謝し、これからは仲よくする事を話し合いました。私もみんなに拝されました。

それが済むと、人はみな、心が柔らいで、酒宴を開きました。

私は、火の神様や家の神様や御幣棚の神様と話しながら、人間たちの舞ったり躍ったりするさまを眺めて深く興がりました。そして二日三日たつと酒宴は終りました。

私は人間たちが仲の善いありさまを見て安心をして、神様たちに別れを告げ、自分の家へ帰りました。

そうしてある日、アイヌ村の方を見ると、今はもう平穏で、人間たちはみんな仲よく、かの老人が村の頭になっています、彼の子供は、今はもう、成人して、妻も子も持って、父や母に孝行をしています。酒を造った時は何時でも、酒宴のはじめに、御幣やお酒を私に送ってよこします。私も人間たちの後に坐して、何時でも人間の国を守護っています。

と、ふくろうの神様が物語りました。

底本：◆「アイヌ神謡集」郷土研究社　１９２３（大正１２）年８月１０日発行
●「えぞおばけ列伝」ぷやら新書刊行会　１９６１（昭和３６）年４月発行